
メガラニア

上の小

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

メガラニア

【コード】

N3271C

【作者名】

上の小

【あらすじ】

ある、探検隊の記者会見がおこなわれた。その記者会見は、まるで夢物語のような事が話されるのだった。

それは恐ろしい冒険だった。今、この記者会見をひらいてくれたのは嬉しいが誰が信じてくれようか。本当に信じられない体験を私達はしたのだ。信じてくれなくてもいい。だけど私は話そう。亡くなった仲間のためにも。

私はジョン・マクマフラー探検隊の一員として冒険にでた。10名ほどの探検隊だ。ジョンはそこで隊長をしている者だったが、腕っ節や実力も間違いなく世界一だった。

私はジョンに通称テラーと呼ばれていた。今でもその名前は気に入っているよ。

私達が向かったのは、南極のはずだった。南極にいき、そこで未知の生物を発見しようと思ったのだ。今思えば馬鹿らしい探検目的だ。

航路は間違いなく南極に向かっていた。

しかし、私達は南極にはつかなかった。一人の船員、あらゆる航路を知り尽くしている男。名前はアロウといった。その男が言ったのだ。

「テラ・アウストラリス・インコグニダ」

私ははっとした。

「メガラニア!？」

ジョンも驚いていた。それと同時に歓喜の表情を浮かべていた。「今すぐ準備をして、探検に行くぞ!」

そこが南極ではないと気がついたのは、そこに氷が無かったからだ。私達は南極を越えていたのかもしれない。だが、奇妙なところだった。半分が氷に覆われ、また半分は森林が生い茂っていたのだ。私達は完全に南極対策の防寒具を装備していたのだが、それに加えてアマゾンの装備も加えた。

そこは非常にじめじめとして暑いところだった。まるで国境のようなところがあり、そこを越えると凍るように寒くなる。まさに幻の大陸といえるような場所だ。

寒さにうんざりしていた私たちはジャングルのような熱帯雨林を探検することにした。そこには何も文明が伝わっていないかのよう信じられない光景を私達に与えてくれるかのようだった。

まだ、この大陸に入ってまもない頃。

何やら、騒がしい声が響き渡ったのだ。

「ほっほっほっほっほ」

ジョンが先に進もうとする私を制止する。

「この先は彼らの縄張りらしい」

ジョンが私に双眼鏡を手渡した。

「ゴリラ……」

私の目に映ったのは野生のゴリラたちだった。

「素晴らしい、こんなにたくさんのゴリラの群れが」

動物好きのル又は目を輝かしている。

「ジョン、ゴリラは見かけにくらべるとずっと大人しい生物だよ。ちよつと挨拶でも行こうか」

「やめる、ル又」

ジョンは小さな声でル又を制止したが、ル又は行ってしまった。

「くそ、何もおこらなければいいが」

私はこの時、何がおこるのかまったく予想がつかなかった。

「うほお おおおおお！」

ゴリラの咆哮がジャングルに響き渡った。

「やばい、みんな逃げるぞ！」

「え？ ル又は？」

「いいから、ここにいたら殺されるぞ！」

ジョンの合図で探検隊は走り出した。

「ぎゃあああああ！！」

後ろからル又の叫び声が聞こえて、後ろをふと見るとゴリラたち

がル又に群がっているのが見えた。

「はあはあ、馬鹿ル又め。今行くやつがいるか」

生態学者のサラッドは息たえだえに話した。

「どういう事です？」

「あそこには子連れのゴリラがたくさんいた。ゴリラはもともと神経質な動物だ。見た事の無い生き物が子供のいるゴリラの群れなんかいってみろ、それこそ恐ろしいことになるぞ」

科学者の難しい話はよく分からなかったが、子供を守るお母さんは強いということは分かった。

「ここまでくれば大丈夫だろう」

ジョンの合図で私達は腰を落ち着けた。

「お前ら、これからは絶対に俺のいう事を聞くんだ。ル又の事は残念だったら、隊長の俺の命令を聞かなかったのだ悪いんだ」

「でも、ル又は救えなかったのですか!？」

ル又の友人だったらクラークは頭に血がのぼっている。

「おい、クラーク。お前ならどうやってル又を救った？」

「ゴリラを射殺しました」

「ここはどこだ？」

「わかりません」

「ここは未知の大陸だ。何が起るのかわからない。ましてやあのたくさんのゴリラ相手にこっちはたったの20名。銃を使ったところで俺達はル又のほかにも何人も殺されたに違いないぞ」

ジョンに言われ、クラークは黙ってしまった。

「昔、大人しいゴリラの家族を驚かしたおろかな探検隊がいた。俺の友人だがな、俺はそれつきり奴の顔を見ていない。俺が奴の探索をして見つけたもの、それは粉々に引き裂かれた奴の死体だったよ」
クラークはもちろん、私も絶句した。探検に詳しくない私達はル又を救おうとして死んでいたであろう。

「オーマイガー」

先頭を歩いていたオーマが立ち止まった。

「オーマ？」

「た、隊長。これはやばいです」

私と隊長は目を凝らすようにして遠くを見た。

「まさに、オーマイガーだ」

目の前には巨大なグリズリーが立っていた。

「おい、お前らこの地形を良く見る。ここはもう熱帯雨林じゃないぞ」

さっきまでじめじめとしていた場所が嘘のように肌寒くまでなっていた。

「た、隊長。もう限界です。やつら気がついていきます。逃げないと

……」

「さて、さてオーマ」

巨大なグリズリーは私からみても5メートルほどの大きさに見えた。どうみても絶望的な壁のようだ。立ち上がって私達を脅している。

グリズリーは四足歩行になると、ゆっくりとオーマのところまで近づいてきた。

「大丈夫だ、あいつは腹は減っていない。このままあいつが見えなくなるまでここでまつんだ」

「無理ですー！！」

オーマはそういうと一目散に走り出した。

「ガオ！」

グリズリーは猛獣の声を発するとオーマを追って走り出した。

「興奮させちまったようだな、逃げるぞみんな！」

探検隊はオーマとは別の方向に走り出した。

「銃で助けてやれないんですか!？」

「馬鹿やろう！ グリズリーに普通の銃なんか聞かないんだよ！」

私達は走りに走り、また熱帯雨林のようなところにきてしまった。

「もう2名死んだ。探索は中止せざるを得まい」

ジョンは短く、寂しげに言った。

「何いつてるんだ隊長！　ここは幻の大陸なんだ！　ここで帰ったら探検隊の名が廃るぜ！」

やる気満々のケビンが言った。

「ケビン、悪いが俺は帰る。これからはケビン探検隊としてがんばれ」

「何、隊長？　いいのか？」

「ああ、俺と共に帰りたいやつはいるか？　ここは危険だ。後でまた装備を整えてくる必要があると思うが」

隊長と一緒に帰ったものは5人。

私を含めて三人が残った。

「テラー。気をつけるよ、ここはやばいところだ」

「アマゾンで危険なのは、アナコンダですよね？」

「違う、ジャガーだ。ジャガーはアナコンダを襲うことはあるが、アナコンダがジャガーを襲うことはない。奴らはグリズリーやゴリラなんかの保守的な生き物じゃない。自分から獲物を追ってきて襲う。その中でもジャガーが一番狩りにすぐれているんだ」

「分かりました。大丈夫です、すごい発見をしますから」

私は隊長に約束をした。

残ったのはケビンとデッド、そして私だ。

私達は密林の奥深くに進んだ。

「みる、テラー！」

デッドが大きな声で叫んだ。

「なんです？」

「こいつは世界最大のワニだ。こいつを撃ち殺して捕まえよう」
イリエワニの一種に見えた。デッドが銃を構えてイリエワニに標準を落とした。

銃の乾いた音が密林に響き、鳥が飛び立っていく音がした。

「ジーザズ」

だが、ワニは怪我一人負っていなかった。

「ど、どういうことだ？　おい、ケビン！」

「しらねえよ、てかあいつこつちみてるよな？」
「にげるー！」

イリエワニに襲われて死んでいる人は一年で3000人を越える話を聞くことがある。もつとも獰猛で危険な爬虫類。

けれど、私はワニが陸上を素早く走ることがないと知っていた。またデッドの放った銃がはずれたことも。

私は冷静だったことから逃げずに観察していた。すると、驚いた光景を目にした。

一匹のジャガーがワニに近づき、上に乗っかってしまったのだ。ワニは口を閉じる力は強いが開く力は弱い。そして、うるこがそこまで丈夫ではないイリエワニはジャガーに首元を噛みつかれるとあつけなく絶命してしまったのだ。

「うぎゃああああー！」
デッドの叫び声が出た。

私はその声の方に近づいてみる。アマゾンで慌てて愚かな行動にでるとそこには死が待っている。

「テラーか！ こつちにくるな、ここはバイソンがいるぞ！」

あたりは草原だった。どこまでも草原、ここで危ない生き物とすればライオンやヒョウなどだと思われるが。

「バイソンがどうしたんです？」

「あの木を見るー！」

私は驚愕した。木に蛸のようにぐちゃぐちゃになってしまってデッドがはりつけられていたのだ。

「バイソンにふつとばされたんだ。やばいぞ、バイソンは強い」

その時、バイソンがぐちゃぐちゃになっているデッドの方に猛突進をしてきた。

「デッド逃げろー！」

ケビンの願いもむなしく、デッドと木はバイソンの一撃をくらって粉々に吹き飛んでしまった。

「デッド……」

ケビンはそういうと、地面に腰を降ろしてしまった。

「俺が探検を続けるなんていわなければ、いつてえええ！」

ケビンの足には大きなアナコンダが噛み付いていた。私はケビンはもう絶対に助からないと思った。

アナコンダはケビンをあつというまにぐるぐる巻きにしてしまった。

「たすけてくれ……テラー」

私も助けたかったのだが、ケビンがそういうとアナコンダはケビンを丸呑みにしてしまったのだ。アナコンダは続けて食事をしないことをしていたから私はそのままゆうゆうと立ち去った。

私もそのまま去ることにしたのだ。一人で探検ができるほどこころは甘くない。

私が船に近づくと、そこにはおびただしい血痕が見えた。

私は急いで船に入るとそこには血まみれになったジョンの姿があった。

「テラーか。憐れだな、先に逃げ帰ろうとした俺達がこのざまじゃあ」

「どうしたんですか!？」

「バーバリライオンにやられた。盲点だった。まさか絶滅したといわれるやつらの群れに遭遇するなんてな」

「バーバリライオンって、百獣の王の中の王って言われる。隊長、手当てをさせてください」

「いや、もう無理だ。俺はもう死ぬ。他のメンバーも全員やられた。手榴弾を使わなきゃしんでたぜ」

「大丈夫です、さあ帰りましょう」

私達は幻の大陸、メガラニアから去ることにした。

10人いたメンバーはわずか2名。散々な結果だった。

だが、航海士が死んでしまったため、私とジョンはしばらく漂流することになった。

「すまないな、テラー」

「大丈夫です。幻の大陸を拝めただけで本望ですよ」

「だが、もう腹が減って死ぬ俺たち」

「ええ、アザラシすらいませんね」

私達は魚でもないかと海を眺めていた。

「おい、今何かいたぞ！」

ジョンが指をさしたほうを見ると、なんと牛が海を泳いでいた。

「なんだあの巨大な牛は！」

「分かりません、でもこいつを食べれば生きられます！」

私はモリをもちだすとそいつに一刺しした。

「おい、ステラーカイギュウだ。信じられん」

「でも、栄養はありそうですね」

私達はそのカイギュウを解体して食べ、見事生き残ることができた。

ジョンは病院に運ばれて今では入院している。

どうだ？ 信じられるか？

私達は幻の大陸を探検し、そして仲間ほとんど死んでしまった。事実を知っているのは私とジョンのみ。

何？ ジョンが今さつき死んだだと？

じゃあ事実を知っているのは私のみだ。だが、残念なことにその航海図といったものはない。その船員は死んでしまったのだ。だから、行きかたは分からない。だが、これから行くものにアドバイスしておこう。

あそこは非常に危険だよ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3271c/>

メガラニア

2009年3月25日13時08分発行